

第Ⅶ章 付 論

蔵見の陶棺について

倉敷考古館館長 間 壁 忠 彦

因幡国、鳥取県岩美郡福部村蔵見古墳群3号の陶棺は、屋根形蓋の上面両端へ鴟尾を飾っている。現在までに全形が復元できた全国唯一の鴟尾付陶棺である。

多数の円筒を脚として、その上に棺身を作り付け、蓋をのせた焼き物の棺を陶棺と呼び、古墳後期から終末期に用いられている。この棺形態は、古墳がある全国どこでも行なわれたものではなく、出土する地域には限りがある。しかし、分布地域全体を日本の地図でみると結構広範囲となり、中・四国地方から福島県にまで及び、北部九州にもその可能性を持つ断片がある。焼き物であるため破損しやすく、完全な姿で眼にできる例が多いとはいえないが、断片となっても不朽の材質であり、存在を認識しやすい。全国で700～800例が知られ、分布範囲が広いといっても、突如として一棺のみが発見されたような例を含めた分布であり、全数の75%以上が岡山県出土である。陶棺分布の中心は岡山県だといえる。岡山に次いで陶棺が多いのは畿内地域である。大和・河内・和泉・摂津・山城でそれぞれ小範囲ながら出土が集中する地域が知られ、ほかに点的にも発見例がある。これらは、岡山県の例に較べると決して多いとは言えないが、陶棺の中では見逃せないものである。それは、畿内の陶棺が岡山の陶棺の大部分と比較して、形態上で差異を示すことによる。一般に、陶棺には、土師質と須恵質の両者があるが、どちらの場合も畿内と岡山との間に形態差が明確に認められる。それを岡山型と畿内型に区分して考える。岡山型は、主として岡山県を中心にした区分がみられ、畿内型は、数の上では少くとも畿内を中心に全国的な分布を示す。岡山以外の地方で出土する陶棺は、畿内の影響下で製作、使用された事例が多いということである。

そのような中で、蔵見古墳群3号の陶棺がどのようなものであるかに目をむけよう。まず、焼成は須恵質である。須恵質陶棺は、岡山型も畿内型も蓋を家形屋根に作ることが多い。それらを共に須恵質家形陶棺と呼んでいるが、家形の形態に二種があり、四注屋根と切妻屋根に分れる。四注屋根は、仏堂や宮廷・官衙などの建物に由来し、切妻屋根は官の倉庫などを模したと思われる。畿内型では四注屋根が原則であり、岡山型では切妻屋根が多く、四注屋根も少し知られる。屋根形の差異以外にも須恵質家形陶棺の畿内型と岡山型では違いがある。その主な点を列挙すると、岡山型は、器壁が厚い・身と蓋を前後に二分して作る・身と蓋の合せ方は身の上端と蓋の下端となった平坦面で合す・外面に低く幅広い突帯をつけることがある。畿内型は、器壁が薄い・身蓋共に一体に作る・身の上端に受部を作ってそれに蓋の下端をのせる・外面に突帯をつけない（無帯）などが指摘できる。

須恵質である蔵見3号墳陶棺では、器壁が厚く、身と蓋は平坦面で合わさる。身と蓋を中心に前後二分して作り、身と蓋が合する部分と二分した前後が合う部分の外面に低いながら幅広い突帯がついている。こうした特徴は、岡山型の須恵質陶棺に合致するのである。蓋の形状も四隅に少し丸味を持っているが、四注屋根だといってよいだろう。しかし、陶棺の形状として、この須恵質陶棺を、典型的な家形陶棺と呼ぶのには少し問題が残る。それは家形根屋の軒先部分の構造である。

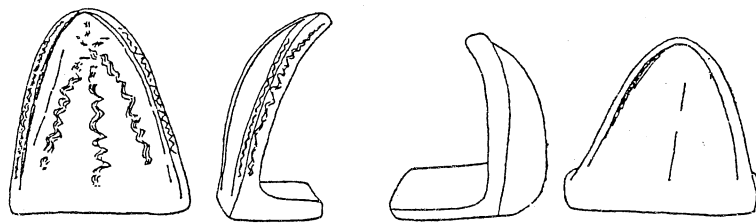
蔵見3号墳陶棺は、屋根形の軒先の端に当る部分が直接に身と合わさっていて、軒先は少しも外部へ延びていない。それに対して、家形陶棺と呼ばれるものは、原則として軒先の下に身と合わさる部分を作り出しているのである。そのために、わずかではあるが、身の上端よりも外方へ軒先部分となった蓋の先端部分が出張った形をなしている。その点は、身と蓋の合せ方に違いがみられた岡山型の場合も畿内型の場合も同様である。岡山県には、ほかに土師質の切妻家形陶棺があるが、この場合にも軒先は他の家形陶棺と同様である。

蓋の下端が蔵見3号のような形態になるのは、家形陶棺ではなく亀甲形陶棺なのである。家形陶棺の主流が須恵質であったのに対し、棺の外面に突帯文様があって、それが亀甲状にみえることに由来する亀甲形陶棺は土師質であることが多い。土師質亀甲形陶棺は、畿内型も岡山型も身蓋共前後二分作りするが、身と蓋の合せ方は、須恵質家形の場合と大体同様の形態差がみられる。岡山型は器壁が厚く、畿内型は薄い点も同じ傾向といえる。外面の突帯が畿内型では幅狭くて高く、岡山型では幅広く低いのを原則とする。畿内には須恵質陶棺にも亀甲形のものがあって、この場合は、身・蓋の合せ方や突帯を畿内型土師質亀甲形陶棺から受け継いだ形態である。これは、須恵質亀甲形陶棺の畿内型といわれる。岡山にも須恵質亀甲型陶棺が少数ながらあり、それらのうちには、畿内型と岡山型の二者が含まれる。陶棺の終末期に岡山へも畿内の影響があり、同じ時期に土師質亀甲形陶棺、岡山型の系譜を受け継いだ須恵質亀甲形のものもあったということである。須恵質亀甲形の場合も、岡山型は身・蓋共前後二分作り、畿内型は一体作りである点は、須恵質家形陶棺と同様である。須恵質の場合家形であれ、亀甲形であれ、岡山型と畿内型とに大別できる形態差は二分作り対一体作り・身蓋の合せ方・器壁の厚さだといえる。

少し煩雑な説明となったが、蔵見3号墳陶棺が、亀甲形の要素も持ちながら、四注屋根家形と呼ぶべき須恵質陶棺で、岡山型の系譜の中へ入れるべきものであろうという点を見てきたのである。蔵見3号墳に接した2号墳の陶棺も断片ながら基本的には同じ形態の須恵質陶棺である。山陰地方には、但馬、因幡、伯耆、出雲で数こそ多くないが陶棺の出土が知られている。それらのうちで形態が点検できる例は、畿内型もしくは畿内型の影響下で製作されたとみられるのが普通のようなものである。ところが蔵見古墳群では、岡山型であった。因幡国は岡山県で最も陶棺の出土密度が高い美作国に接しているとはいえ、山陰の陶棺としては特異な位置を占めるのが蔵見の陶棺ということになる。

鴟尾付陶棺として全体形が見えるのは、蔵見3号墳が唯一であるが、他にもその可能性を持つものが知られている。蓋の両端^{註2}上に残る剝離痕跡から鴟尾付であったかと推定された岡山県倉敷市玉島長尾出土の小形陶棺があり、岡山県真庭郡久世町五反谷古墳出土とされる小形鴟尾一對とか、須恵器窯址で陶棺も焼成した岡山県邑久郡牛窓町寒風窯址群採集の小形鴟尾のように陶棺へ付着していたかと推察できる例もある。これらは、鴟尾か陶棺本体かのいずれか一方のみが残った例からの推測であるが、東京国立博物館所蔵の岡山県勝田郡勝央町大字平、字五反途の横穴式石室から出土したという鴟尾の場合は、少しは具体像にせまることができる。

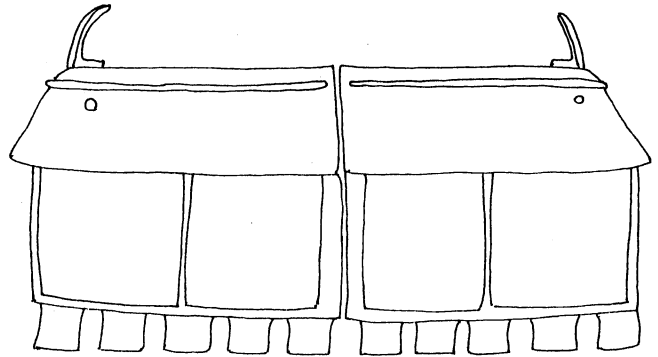
勝央町五反途の鴟尾は、古くから^{註3}学界で明示されてきた資料で、東京



挿図25. 勝央町五反途古墳の鴟尾

《藤沢一夫「古墳と墓誌」『日本考古学講座（歴史時代）』による》
左：高さ19cm。

国立博物館へは1910年に坏4、埴3、平瓶2、陶栓1と共に収蔵、同時出土の陶棺は地元に残されたという。陶棺^{註4}本体は、その後に行方不明であるが、幸運にもそれと推定できる陶棺^{註5}の写真図版が残っている。その図版でみると、須恵質であったかと推定でき、形態は亀甲形陶棺の要素を残しながら、四注家形陶棺の部類へ入れるべきものである。蔵見の例とは、若干差異もあるが類似している点も多い。伴出の須恵器が示す年代は蔵見も五反途も共に古墳の最終末期としてよからう。また、東京国立博物館に残る陶栓1点は、小形のものと、写真図版にみえる五反途陶棺の蓋の孔とよく対応しそうな大きといえる。五反途と蔵見の鴟尾付陶棺は、それぞれ個性を持ちながら相互に無関係とは思えないほどの類縁性を考えさせるのである。



挿図26. 勝央町五反途陶棺推定復元図

和田千吉『日本遺跡遺物図譜』の写真図版と東京国立博物館蔵鴟尾からの五反途陶棺推定復元図。

仏教的要素が古墳の棺に強くあらわれた鴟尾付陶棺の類例にふれたが、仏教的要素では、蔵見古墳群陶棺については、見過ごしてしまえないことがある。明治時代に蔵見古墳群中で採集したという陶棺片に蓮花文がみられたという記録である。その資料の行方は不明のようであるから、現在点検することはできないが、岡山県邑久郡長船町本坊山例（東京国立博物館）、同真庭郡落合町下一色2号墳例（落合町教育委員会）のような蓮花文浮彫りある陶棺例に通じるものであった可能性もあることになる。だとすれば、蔵見古墳群の仏教的要素は、さらに強かったことになるのである。

註1 間壁葎子「岡山の陶棺」『岡山の歴史と文化』1983. 福武書店『吉備古代史の基礎的研究』1992. 学生社所収

註2 間壁忠彦・間壁葎子「鴟尾付と推定される小陶棺」『倉敷の歴史（倉敷市史研究紀要）』5. 1995.

註3 後藤守一『日本考古学』1927. 四海書房、藤沢一夫「墳墓と墓誌」『日本考古学講座（歴史時代・古代）』1956. 河出書房

註4 本村豪章「古墳時代の基礎研究稿—資料篇（I）—」『東京国立博物館紀要』16. 1980. この資料に興味を示された本村豪章氏は1973年末から翌年初めにかけて、五反途1000番地の横穴式石室を調査されたが、須恵質切妻家形陶棺—基分が断片となって出土した程度で、鴟尾との関係は明確にならなかったようである。その陶棺は広島大学文学部考古学研究室に保管されている。

註5 和田千吉『日本遺跡遺物図譜（第5輯）』1916

註6 伊藤源作「鳥取市附近古墳」『地理と歴史』1—4. 1900. で「……備前邑久郡より出でたる陶棺（博物館陳列）にみる、菊形の紋形おぼろげに存せる部分を得たり。」と記され、文中の博物館は現在の東京国立博物館、邑久郡より出でたる陶棺は岡山県長船町本坊山の蓮花文ある陶棺のことであり、この文は和田千吉「陶棺埋没の研究」考古界1—4. 1901に引用されている。またこのことは、斎藤和夫・森浩一「古代学研究」1949以来、陶棺地名表に記されることが多い。